

## 十、青柳種信の篠栗回村

文政七年(一八二四)の春たけなわのころ、植木村の方から乙犬村へ越す切通し道をやってくる一団の人士がありました。質素な旅姿ながら、みなひきしまった顔つきで、腰には矢立(当時の筆記用具)を差し、目立った地物などがあると、すばやく野帳にスケッチしています。

一団の中心人物は青柳種信。彼は福岡藩の足輕身分でしたが、広く世に知られた国学者で、藩から藩内全域の調査を命じられて、一門の長野勝太郎・児玉文吾らをひきいて、村々をまわっているのです。

一行は一日にだいたい二村の割りで調査を進め、二月二十八日乙犬・大隈、二十九日久原・和田、三月一日津波黒・田中、三月二日高田・萩尾、三日金出・篠栗、四日若杉・尾仲、五日若杉山登山の順に回村して、途中、久原・和田・高田・萩尾・篠栗・若杉・尾仲にそれぞれ

れ一泊しています。

篠栗村の場合は宿場の本陣があつて、足輕身分でも公用だから泊まれたはずなのに、やはり他と同じに庄屋さん宅に泊まっています。これはたぶん、村の庄屋さん宅のほうの話が聞きやすかつたし、また村人たちも家に伝わる文書を遠慮なく持ち込んできたからでしょう。中世文書に通じていた種信は、真偽とりませの文書のうちから本物を選んで、野帳に写しとつています。

その野帳は『筑前町村書上帳』として、まとめて公刊されていますので、尽きない興味をもって読むことができますが、それはまた、青柳一門が藩命にこたえて編纂した『筑前国統風土記拾遺』という貴重な地誌の資料となつたものです。

現在の切通し道。この道は、古くは糟屋郡を横断して太宰府に通ずる要道だったと考えられます。

篠栗古文書会 高橋 健吾

